

偉大なる存在への 地ならし： 1854年までの エイブラハム・リンカーン

ダグラス・L・ウィルソン



読書好きで主に独学で学問を身に付けたリンカーンは、やがて、おそらく米国で最も素晴らしい極上の政治的文章をつづり、恵まれた出自の同世代人を大きく引き離すことになる。

エ

イブラハム・リンカーンはすべての米国人の中で最もよく知られており、最も広く賞賛されている人物である。またその生涯の軌跡が一般に知られている唯一の政治家でもある。自助努力の人の典型としてのリンカーン像、そして辺境の地での貧しい生い立ちから大統領へと上り詰めた伝説は、米国人の心の中にしっかりと焼き付いている。

「奴隷制に賛成する者がいると、わたしはいつも、その者自身に奴隷を体験させてやりたいという強い衝動を感じる」

第16代大統領リンカーンについて米国人が一般に知っていることは、確かに伝記というよりは伝説である。しかしこのおなじみの話は大筋で史実なのである。

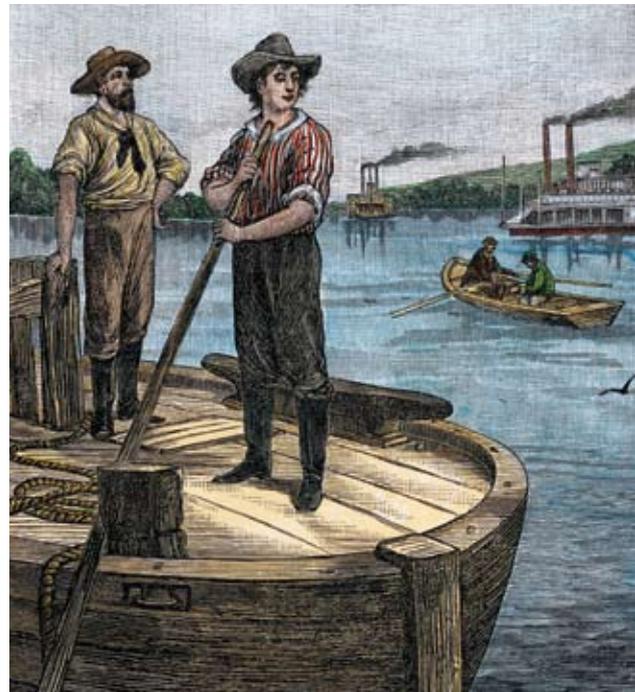
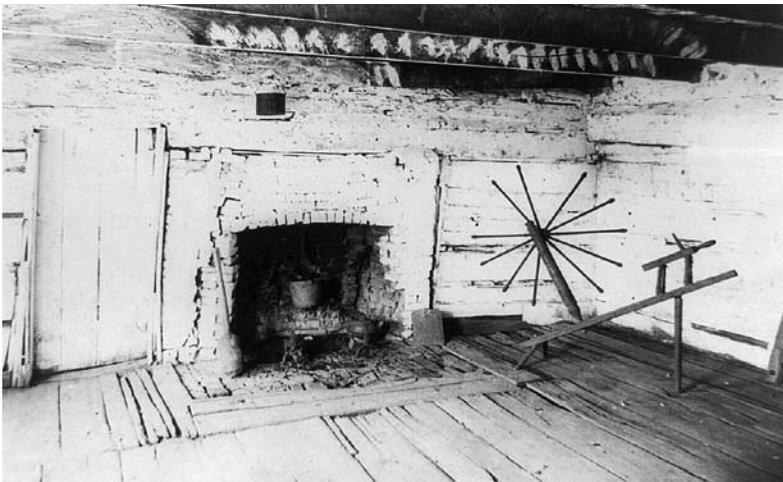
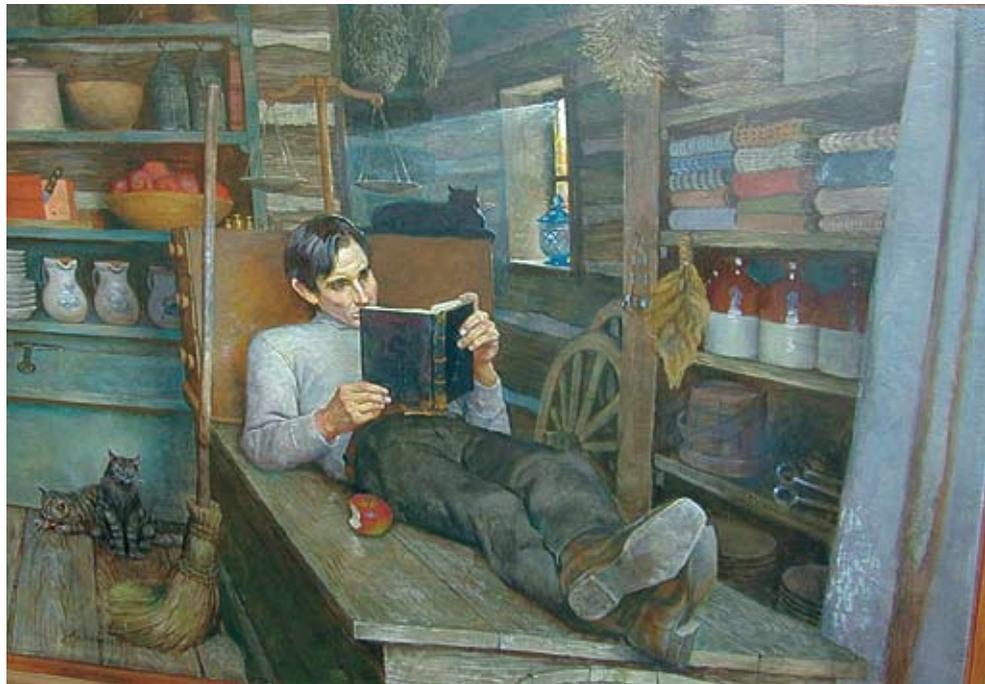
リンカーンは1809年、教育のない下層民を両親として丸太小屋で生まれた。荒野と呼ぶのがふさわしい未開拓の森林地帯の居住地で育った。そこで7歳のころから、斧を手に父親の農場開墾を手伝った。学校教育を受けられたのはわずか数ヶ月間であったが、たゆみない努力により独学で読み書き・計算の基礎を身に付けた。早くから自立し肉体労働に就いていたリンカーンは、英文法も、測量に必要な数学も本で学んだ。27歳で法曹界に入るが、そ

のための法律知識も読書で得たものである。そしてもちろん、米国史上最悪の危機の中で素晴らしい手腕を発揮し、国を分裂から救い、奴隷制の解体を指揮し、真の意味で米国に殉じた。

リンカーンの世界的な名声は、1861年から1865年にかけての南北戦争で、大統領職にあった彼の英断と大政治家にふさわしい行動の結果ではあるが、米国人の誰もがよく知るリンカーン伝説は、大統領になる前のイメージと深く結び付いている。手に斧を持った、インディアナの貧しい開拓民の息子。炬端の明かりで読書をする丸太小屋の少年。正直者の店員。村の郵便局長。弱い者いじめをする者たちにひるむことなく立ち向かう新参者。コンパスと



「荒野と呼ぶのがふさわしい」ケンタッキー州ノブクリークにあるエイブラハム・リンカーン生誕地国立史跡



たたき上げの男の肖像
 左下から時計回りに：リンカーン生家の小屋の内部。右側にあるのは母親が使ったジェニー紡績機
 左上：計算練習のための自作のノート
 右上：店員として勤務しながら寸暇を惜しんで法律を学ぶリンカーン
 右下：イリノイから農作物を下流に運ぶ平底船で働くリンカーン。最終目的地はニューオーリンズ

測定用の鎖を持った独習の測量士。弁護士開業に向けて一心不乱に勉学に励む青年。それが、米国人におなじみのリンカーンのイメージなのである。

リンカーンの成長にとって決定的に重要な側面ではあるものの人々のよく知る伝説に含まれていないのは、彼の合理的で非常に懐疑的な気質と、彼が人格形成期に正面から向き合わなくて

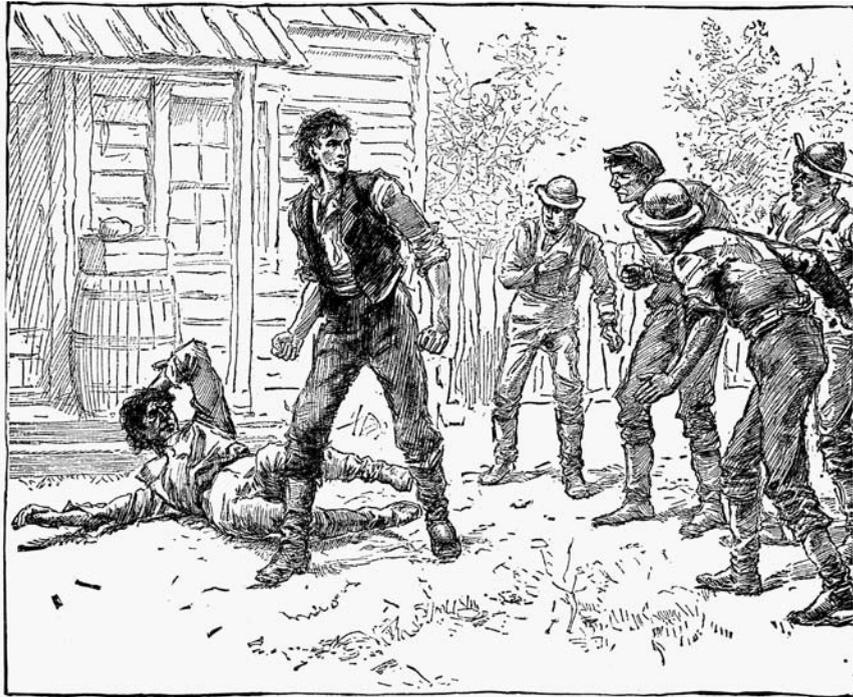
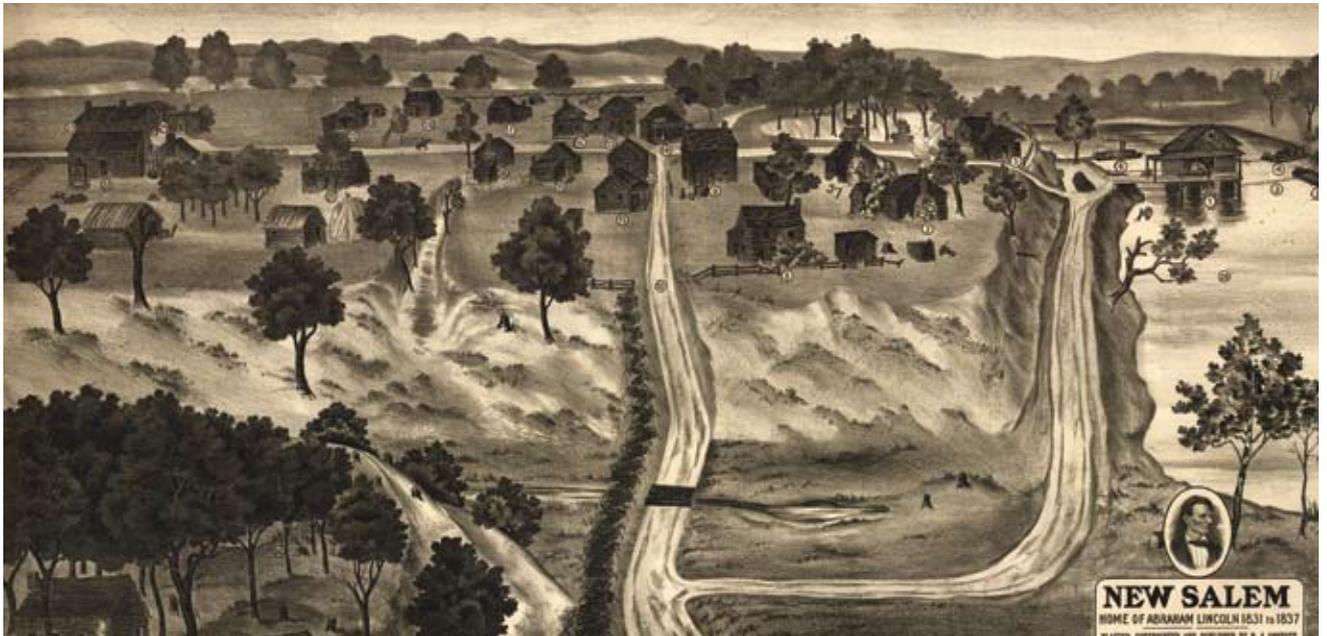
はならなかった極めて現実的な苦悩である。

学ぶ用意を万全に整えた頭脳

最初からエイブラハム・リンカーンは違っていた。それも、父親をはじめとする周囲の人々が、良しとはしない違いだった。同じ年ごろのほとんどの子どもたちと違って、リンカーンは言

葉と意味に非常に強い関心を寄せていた。幼いころから読み書きを学び、借りられる本を探し出しては、ノートを取りながら読書にふけた。だが父親やほかの子どもたちには、農場での仕事から逃れるための口実、怠け癖にしが見えなかった。

勉強するよう励ましてくれたのは継母だった。後に、弁護士事務所でリン



上：リンカーンが22歳のときに移り住んだイリノイ州ニューセラム。間もなく、地域住民から一目置かれるようになり、イリノイ州議会議員に選出された。
 左：ほとんど無敵のレスラーと見なされていたリンカーン。ニューセラムの悪名高きごろつき集団「クラリー・グローブ・ボーイズ」のジャック・アームストロングを投げ飛ばす。

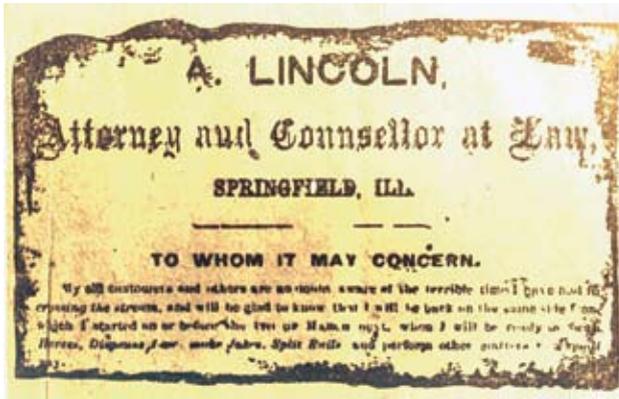
明される。米国人の書いたすべての文書の中で、最も広く知られ、最も強い影響力を持つことになったからである。

故郷を離れて独り歩きを始めた22歳のリンカーンは、イリノイ州の小さな村ニューセラムに落ち着いた。この地で過ごす6年のうちに、実にさまざまな出来事を経験することになる。見た目の印象が良くなかったリンカーンは、人々から「のそのそした大男」「身なりが悪い」と形容されたが、彼の持っていた数々の強みに気付いていた住民もいた。例えば、知性が高く並外れた知識を持っているだけでなく、まれに見る気立てのよさと気さくさを備えていること。競走、跳躍、投てきなど一般的な運動競技で抜きん出ている上、腕力も傑出しており、レスリングではほとんど負け知らずであったこと。アルコールは飲まなかったが、人々と過ごす時間を楽しみ、非常に話し上

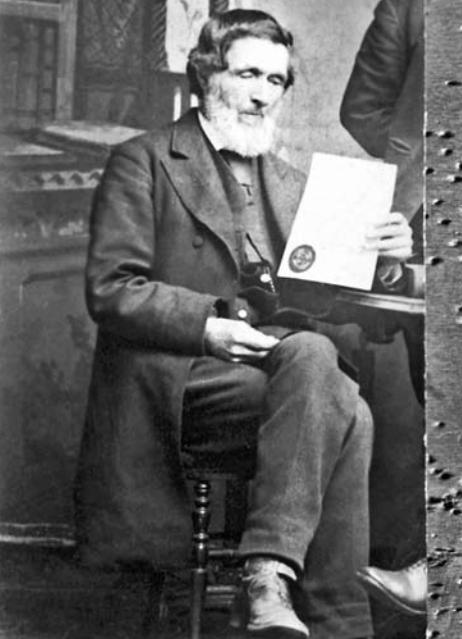
カーンが最初にパートナーを組んだ相手のウィリアム・H・ハートンに彼女はこう語っている。少年時代のリンカーンは「肉体労働が好きではありませんでした」怠けていたのではなく、「知識を得ることに熱心だったのです。物事を知りたかったのです。もし苦痛と労働によって知識が得られるならば、もちろんそうしたいでしょう」

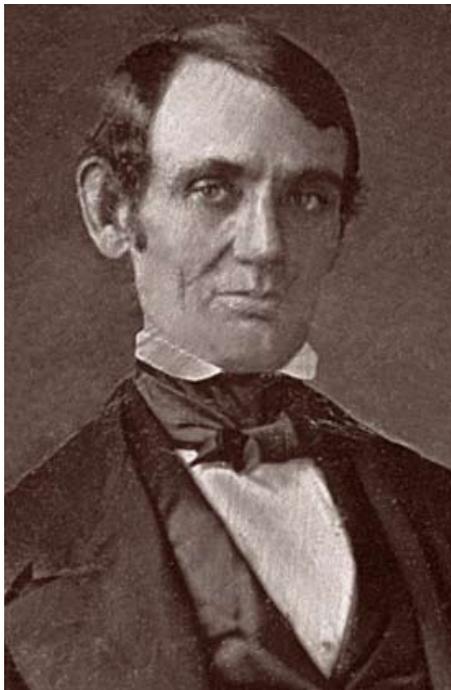
少年時代の読書はリンカーンの伝説

に必ず登場するが、長い目で見ると、たぶん文章を書くことの方が重要だったと思われる。リンカーン暗殺後、ハートンは少年時代の大統領を知るインディアナの住民たちを探し出してインタビューしている。人々の記憶の中のリンカーンは、エッセイや詩を書く才能のある少年として目立っていた。そして結局のところ、リンカーンの残した書き物は、彼の取った行動と少なくとも同じくらい重要であることが証



リンカーンはウィリアム・H・ハーンドン（左下）をパートナーとして弁護士事務所を開設した。場所はイリノイ州スプリングフィールドの商業地区（下）で、同地区にはイリノイ州議会議事堂（最下段）があった。





エイブラハム・リンカーンとメアリー・トッド・リンカーンの写真のうち、今日知られている最も古い写真（1846年ごろ）

手であったこと。こうして人に好かれたリンカーンは、ニューセーラムに移り住んだ最初の年、ネイティブインディアンとの戦いで義勇兵団が組織されると、地元の歩兵中隊の隊長に任命されたのである。彼は、何年もたってからこの出来事を回想する中で、「その後の人生で成功はいろいろとあったが、あんなに誇らしいと思った出来事には巡り合えないでいる」と認めている。

ニューセーラム時代のリンカーンは、さまざまな仕事で生計を立てながら、学校に行けなかった埋め合わせに猛勉強を続けた。学校教育の欠如は、リンカーンが生涯を通じて痛切に感じていたことだった。借りられる本があればいつでもそれを借りて、歴史や生物学を学んだ。文学に強い興味を示し、特にシェークスピアとスコットランドの詩人ロバート・バーズを愛読した。

教会に通うバプテスト派の家庭で育ったリンカーンだが、宗教に深くかわるることには抵抗を示した。ボルネー伯爵やトマス・ペインなど18世紀の合理主義者の影響を受けていたリンカーンは、キリスト教の基本的な教義に

懐疑的であったのだ。従って、幼少期の教会通いは彼に宗教心を植え付けることはなかったが、やがて生涯にわたって影響を持ち続けることになるひとつの関心を育てた。演説への関心である。インディアナの辺境で、教会の説教や政治家の街頭演説をまねて遊びだちを楽しませてきたリンカーンは、ニューセーラムのディベートクラブに入会し、演説の技能を磨いた。

駆け出しの政治家として

リンカーンは、信仰心のあつさと宗派間の論争が特徴である開拓時代の文化の中で育ちながらも、宗教にのめり込むことはなかった。しかしそうした文化的背景のおかげで、政治には早くから関心を持った。彼が関心に向けたほとんどの対象について言えることだが、リンカーンは間もなく、演説の並外れた名手としての力量を証明した。それは政治家としての成功に直結する才能であった。ニューセーラムに移り住んで1年もたたないうちに、彼は州議会議員候補として名乗りを上げた。しかし、本人が後に回顧しているように、このときの出馬は「生涯でただ一

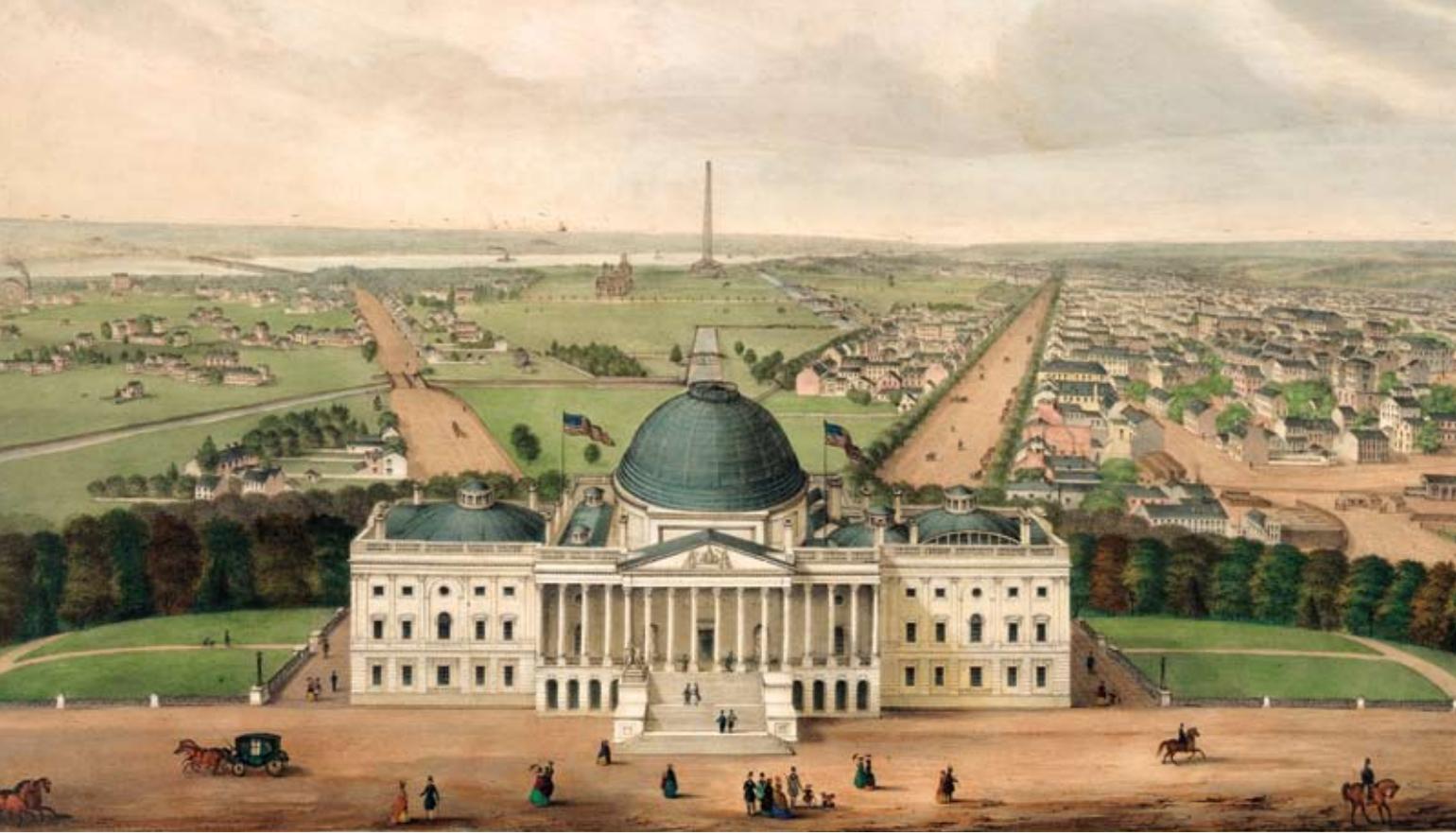
度、人民に打ちのめされた」経験となるのだった。

リンカーンは次の選挙で快勝し、その後4期連続で議員を務めることになった。そして2期目には、最若年議員のひとりであったにもかかわらずホイッグ党の院内総務に選ばれた。演説の巧みさ、行動力、組織をまとめリーダーシップを発揮する手腕が評価された結果としてもたらされた荣誉であった。

駆け出し議員リンカーンの政治の特徴に目を向けると、実に多くのことが分かる。大衆主義者として知られたアンドリュー・ジャクソンと、ジャクソンが所属する民主党を熱烈に支持する人たちが圧倒的多数を占めていた時代に頭角を現したリンカーンは、ここでもその他大勢との違いを示した。政治キャリアの出だし早々に「反ジャクソン」を掲げたのである。政府出資の銀行の設立や公共事業など、ジャクソンに反対するホイッグ党員らが進めようとしていた経済開発政策に魅力を感じたからに違いない。もし、選挙に当選することが政治における唯一の目標だったとしたら、リンカーンは帰属する政党を間違えたことになる。

州議会選挙の争点は全国的な問題というよりは地方問題であったが、ニューセーラムに移住して以来、リンカーンの周りはジャクソン派の民主党員ばかりだった。にもかかわらず当選を果たしたこと、しかもジャクソン色の濃い選挙区で十分な差をつけて勝ったということが、この駆け出しの政治家の優秀さを語っている。

議会選挙に向けて運動していたリンカーンは、ジョン・トッド・スチュアートというイリノイ州都スプリングフィールドの弁護士から、弁護士になる勉強をするよう勧められた。リンカーンは後に、勉強のためにさらに多忙となったこの時期の生活をどのようにこなしたかを三人称で書いている。「彼はスチュアートから本を借り、家に持ち帰って猛然と勉強した。独学だった。



衣食住をまかなうため、まだ測量の仕事にもかかわっていた。議会が始まると法律の本は閉じなくてはならなかったが、閉会すると再び広げた」

2年後に弁護士資格を取得すると、リンカーンはスチュアートのジュニアパートナーとなり、1837年にスプリングフィールドに転居した。程なくしてスチュアートは米国連邦議会に選出され、ワシントンD.Cへ去った。弁護士事務所の経営を委ねられたリンカーンは、自力で事務所を切り盛りしなくてはならなくなった。それから数年後、リンカーンはスプリングフィールドの法曹界をリードしていたスティーブン・T・ローガンの事務所に入ることになった。ローガンは後に、こう回想している。リンカーンは弁護士としての経歴が浅かったが、「案件に取り掛かると、それに関連する事柄すべてを掌握しようと努めた。その仕事ぶりのおかげで、この地を離れるころには相当な辣腕弁護士になっていた」

恋するリンカーン

リンカーン少年の友だちも家族も、

彼は女の子にはあまり興味を示さないという共通認識を持っていた。ところがニューセーラムに移ると、宿屋の娘アン・ラトレッジに恋をした。けれども、婚約から程なくして、ラトレッジは「脳炎」と呼ばれる病気にかかり、ほんの数週間のうちに亡くなった。リンカーンの母は、彼が9歳のときに急逝していた。リンカーンが精神的に不安定になっていたのは、こうした突然の死を経験したことが原因だったかもしれない。友人たちは、近親者との度重なる死別で失意に沈むリンカーンが自殺を図るのではないかと心配した。

しかし、リンカーンは少しずつ元気を取り戻し、1年余りが経過したころには、再び好きな女性と付き合い始めた。今度の相手は、メアリー・オーウェンス。ケンタッキーの裕福な家庭で育った、教育のある上品な女性である。残った手紙から分かることだが、リンカーンはもうすぐ婚約かというところまでメアリー・オーウェンスとの関係を深めたものの、やはり自分は彼女を愛していないとの結論に達し、自分は結婚相手としてふさわしくない男であると彼女に納得させてなんとか結婚を

リンカーンは1847年12月から1期、米国連邦議会議員を務めた。当時のワシントンD.Cを描いたこの絵には、議事堂（ドームはこの後建設が始まり、リンカーンの大統領任期中に完成した）と、遠方にワシントン記念塔（当時建設中で、実物より高く描かれている）が見える。ホワイトハウスに至るペンシルベニア通りが議事堂から右方向に延びている。

回避しようとしている。しかし、メアリー・オーウェンスにも結婚の確固たる意思がないことが分かると、リンカーンは自分の名誉に懸けても結婚を申し込まなくてはならないと感じた。そしてリンカーンが驚き悔しがったことに、彼女はその申し込みを断ったのである。リンカーンは親友にこう語っている。「他の連中はガールフレンドに翻弄されてみんなの笑い者になる。わたしの場合はまったく事情が違う。わたしはこの一件で、自分で自分を徹底的に笑い者にしてしまったのだ」

それから1年もたたないうちに、リンカーンは再び、ケンタッキー出身の美人に夢中になっている自分に気付いた。今回の相手は前回にも増して教育があり、品がよく、裕福な良家の子女、

ケンタッキー州レキシントンのメアリー・トッドである。求婚者は大勢いた。しかし理由は定かでないが、彼女はリンカーンに照準を合わせていた。リンカーンはまたいつものパターンで、自分はメアリー・トッドを愛していないと判断を下し、ほかの女性に目が移っていき、メアリー・トッドとの関係を終わらせたいと願った。しかし今度もまた物事はそう簡単にいかなかった。

再びふさぎ込むリンカーンだった。彼はワシントンへ去った弁護士事務所のパートナーにこう書き送っている。「わたしは今や、この世で一番惨めな男です。もし今のわたしの気持ちが全人類に均等に割り当てられたら、笑顔の人は地球上からひとりもいなくなるでしょう」またルームメートのジョシュア・スピードにも、自分は死ぬことは恐くないが、「まだ、自分がこの世に生きたことを誰かの記憶にとどめるだけのことを何もしていない」と語っている。それから23年後、リンカーンはホワイトハウスでこの発言を思い出し、(反乱を起こした南部連合諸州の奴隷を自由の身にする) 奴隷解放宣言を書いたことによって、自分を記憶に残してもらえただけのことができたと思いたい、とスピードに語っている。

リンカーンはやがて元気を取り戻し、メアリー・トッドともよりを戻した。そして1842年11月4日、2人は今日結婚すると発表して親友や家族を驚かせた。2人がすべての面で似合いのカップルだとは言えないことを、同僚や仲間たちは結婚前からよく分かっていた。そして間もなく、育ちやお互いへの期待の違いを意識するようになった。リンカーンは世間体とか礼儀作法とかについてあまり分かっていなかったし、気にもかけなかった。しかし妻はそうしたことを気にしたし、意見が食い違ったときに爆発寸前になる自分の感情をうまく抑えることができなかった。雑用は奴隷任せという南部の特権階級の家で育ちリンカーン夫人となったメアリーには、中流家庭の家事にいそしむ用意がなかったのだ

る。さらに、政治家、法律家としてのキャリアを歩むリンカーンは、ひんぱんに旅行に出掛けなければならなかった。何週間も続くこともあった夫の不在は、家庭内の問題を深刻にするばかりだった。それでも、2人が共に子どもたちに深い愛情を注ぎ、それが大きくなりつつあった家族の持続的な絆を固めるのに役立った。

連邦議会議員として

結婚したころのことだが、リンカーンは5期目となる州議会議員選挙への出馬を辞退し、連邦議会選挙を視野に入れるようになった。1847年12月、ついに当選を果たして連邦議会下院の議席を獲得した時、ちょうどメキシコ戦争が米国の勝利のうちに終結しようとしていた。リンカーンは直ちにほかのホイッグ党議員らと組んで、領土を広げる目的で憲法に反して不正な戦争を仕掛けたとして、ジェームズ・K・ポーク大統領に対する攻撃を始めた。戦争支持が非常に強かったリンカーンの地元では、大統領を攻撃したリンカーンに対してかなり批判の声が上がった。

戦争に賛成する民主党の支持者とは原理原則の問題で対立したリンカーンだが、一方では、リンカーンの実用主義は仲間のホイッグ党員の一部の怒りを買うことになった。ホイッグ党の重鎮の多くは党の最有力者ヘンリー・クレイを1848年大統領選の候補に推したが、リンカーンはメキシコ戦争の英雄であるザカリー・テイラー陸軍少将を支持した。テイラーには政治家としての実績も党内人脈もなかったが、リンカーンは、ホイッグ党が選挙で敗北を続けていること、何よりも勝利が重要であることを訴えたのである。皮肉なことに、リンカーンの議員任期が終わると、大統領選を制したテイラーは、閣僚人事に関するリンカーンの提言を無視して、リンカーン自身の求めたポストを彼に与えなかった。リンカーンが狙っていたのは内務省の国有地管理局長のポストであった。

議会での短いキャリアが終わったリンカーンは、政治的野心をくじかれ、党のための精力的な働きも報われることなく、イリノイに戻った。

リンカーンはその後、三人称を使ってこう書いている。「議会から戻ると、彼は以前にも増して弁護士事務所の仕事に打ち込むようになった」弁護士業に身が入るようになると、弁護士としての能力も評判も高まった。そしてリンカーンの弁護士事務所はイリノイ法曹界に名声をはせた。この時期についてリンカーンは「政治に興味を失いつつあった」と述べている。ユークリッド幾何学の勉強など、政治以外の知的分野への関心を深めていたのである。

しかし1850年代に入り、奴隷問題が熱を帯びると、昔からの政治論争好きがリンカーンの中に思いがけなくよみがえってきた。「彼の心の中にあつた政治への思いは、弁護士業への傾注によって片隅に追いやられていたが、1854年のミズーリ協定破棄は、それまでにない勢いで彼を奮い立たせた」とリンカーンは自らの物語で書いている。

ダグラス・L・ウィルソンはノックス大学リンカーン研究センターの共同ディレクター。著書に『Lincoln Before Washington: New Perspectives on the Illinois Years』(ワシントン時代より前のリンカーン：イリノイ時代についての新しい視点)がある。